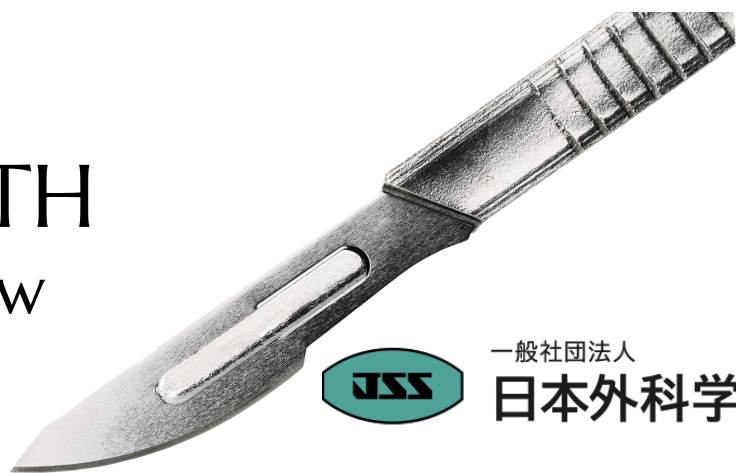


BUILD YOUR PATH

Role Model Interview



一般社団法人

日本外科学会

山元 謙太郎 先生 開業医

PART 1 : BUILD 「あなたは何を築いてきましたか？」

Q1. まずは、現在の肩書やご専門分野について教えてくださいませんか？

現在は社会医療法人謙仁会の理事長を務めながら、佐賀県医師会の常任理事、日本医師会「未来医師会ビジョン委員会」の委員などを拝命しております。専門資格としては、外科専門医および肝臓専門医を持っています。

Q2. 医学生や研修医の頃は、どのような医師になりたいと考えていらっしゃいましたか？

医学生の頃から「将来は外科に進もう」と決めていました。薬に頼るだけでなく、自分の手で病気をストレートかつ最終的に解決できる領域だという点に強い魅力を感じていたんです。

ただ、研修医になって高難度の緻密な手術を目の当たりにすると、自分の無力さを痛感させられましたね。今思えば少し滑稽な話ですが、当時は研修医の同期同士で「せめて虫垂炎の手術くらいは一人前にできるようにになりたいな...」と真顔で語り合っていたのを覚えています（笑）。

Q3. 久留米大学から上京され、東京大学外科系研修医を選ばれたきっかけや決め手は何だったのでしょうか？

大学時代に東大の見学に行った時のエピソードが強烈でした。当時は泊まる場所も決めずに上京してしまって、結局研修室に寝泊まりさせてもらったんです。その時に当時の肝胆膵・人工臓器移植外科の幕内雅敏教授から「君、こっちに来なさい」とお声をかけていただきました。きっと誰にでも言われていたのだと思いますが（笑）、それがきっかけで卒後に上京し、東大の外科系研修医としてスタートを切る決定打になりました。

その後、國土典宏教授（現・国立国際医療研究センター理事長）をはじめとする素晴らしい恩師や先輩方、仲間たちと出会い、屋形船での交流なども含めてかけがえのない時間を過ごさせていただきました。

Q4. 若い頃に思い描いていたキャリアと比べると、現在はどのくらい一致していますか？

これはもう、「大きく変わった」と言わざるを得ません（笑）。

若い頃は、生涯バリバリとメスを握り続けるアグレッシブな外科医像を描いていました。しかし現在では、手術のメイン執刀医というよりは助手を務めることが多くなりました。また、佐賀県医師会の常任理事として医療行政にも深く関わらせていただいています。若手時代は医師会という組織をどこか「伏魔殿」のように捉えていた部分もありましたから、自分がその中で精力的に動いているとは、当時は夢にも思っていませんでした。

2010年（卒後9年目）に東大を退局して地元の佐賀県伊万里市へ戻る際、國土教授から「外科医にもさまざまな働き方があるから、頑張りなさい」と温かく背中を押していただきました。先進医療の最前線から地域医療の世界へ飛び込むことには当初迷いもありましたが、実際に身を置くと、その面白さと重要性をひしひしと実感する毎日です。

特に佐賀県内でも医師少数区域を抱える地域ですので、地域全体を巻き込んだ医療人材の育成に力を注いでいます。さらに、東日本大震災をはじめ、平成28年（2016年）熊本地震、九州北部豪雨、能登半島地震、令和8年（2026年）熊本地震など、日本医師会災害医療チーム（JMAT）として何度も現地へ出動したことも予想外の展開でした。

地元に戻った当初は術者として突っ走っていましたが、今では外科医という枠を超えて「一人の医療者」として地域や社会に貢献するキャリアを歩んでいます。そして、災害現場の緊迫した局面において、外科医として培ったアセスメント能力や判断力、手技のスキルが今なお非常に強く生きていて感じています。

PART 2：PATH「あなたの歩んできた道」

Q1. これまでのキャリアの中で、どのような分岐点があり、ご自身のPATH（歩む道）が形作られてきたのでしょうか？

最大の原点と言えるのは、2002年（24歳）の東京大学外科系研修医時代ですね。九州の地方から東京へ出てくると、周りで働く先生方がみな本当に輝いて見えました。教育面でも洗練されていて、当初は医学部生からの質問やレポートの相談に対しても全く気の利いたコメントができず、自分の未熟さに落ち込む日々でした。それでも、まるで合宿生活のような怒涛の毎日の中でタスクを一つひとつ愚直にこなしていくうちに、気づけば応えられるようになっていたんです。「どんなに壁が高くても諦めないこと」の大切さを身体で覚えた時期でした。そして何より、医師、コメディカル、患者さんといった素晴らしい方々との「一生モノのご縁」を得られたことが、お金では絶対に買えない最大の財産になりました。

次の転機は2010年、33歳で地元（佐賀）へ戻った時です。先進医療の現場から一転、地域でバリバリ外科をやろうと意気込んで帰ってきたのですが、当時は手術デバイスすら十分に揃っていない環境

でした。そのため「まずは診療・手術の環境を整えること」からのスタートでした。翌2011年には東日本大震災が発生し、気仙沼市への支援をきっかけにJMATへ加入しました。限られた人手や医療資源の中で、実は硬膜外麻酔だけでの肝切除や腹腔鏡下肝切除などをこなす経験も経ながら、災害医療や地域医療の厳しい現実と正面から向き合っていました。

そして2024年、佐賀県医師会への参画です。私の基本スタンスは昔から「お話が来たら断らない」精神ですので（笑）、地域医療の維持や医療行政の推進に向けて、現在もまっしぐらに突き進んでいます。

Q2. 外科医としての道を選び、「この分野で良かった」と心から思う瞬間や醍醐味は何ですか？

何と言っても、「自分で解決できる技術・手技を持っている」という圧倒的な安心感と自負ですね。これに代わるものは他にありません。自分で病気を見つけ、手術計画を立て、自らメスを握る。不幸にも再発した際には化学療法を行い、最期のお看取りまで責任を持ってお付き合いさせていただく。特に地域医療における外科の醍醐味は、単に「疾患」を診るのではなく、「人」そのものを診る点に尽きます。

「この患者さんにとって、この治療を施すことが本当に幸せなのだろうか？」「その方の人生観や歩みに寄り添った、一番望ましい医療とは何か？」を考え抜き、患者さんと共に医療を作り上げていく。一筋縄ではいかない難しさもありますが、一人ひとりの深い人生に携わらせていただけることは、医師として本当に光栄なことだと感じています。

Q3. 外科専門医の取得や若手時代の外科研修で培った経験は、現在の多角的なキャリアにどう活かされていますか？

外科専門医や学位の取得プロセスを通じて身についた「外科的ロジカルシンキング（論理的思考回路）」が、現在のあらゆる局面で強烈に生きています。例えば、院内や地域のコメディカルスタッフに対する学会発表の題材提案や論文指導を行う際にも、問題を構造化して解決へ導く外科特有の思考プロセスがそのまま活用できています。

手術室で培った「迅速かつ正確な状況判断力」や「論理的な課題解決能力」は、メスを握る時だけでなく、病院経営、地域医療の制度設計、さらには災害現場での判断に至るまで、あらゆる場面で自分を支える強力な武器になっています。

PART 3：NEXT PATH 「これから歩く人へ」

Q1. もし今、ご自身が医学生や研修医時代に戻れるとしたら、当時の自分にどんな言葉をかけてあげたいですか？

「出会う人、すべての人との繋がりを絶対に大切にしてください」と伝えたいですね。

若い頃は自分の力だけで突き進んでいるように思いがちですが、キャリアを重ねるほどに痛感するのは「人を大切にすることが、巡り巡って自分自身を助けてくれる」ということです。

医師の先輩や同僚、後輩はもちろん、看護師やコメディカルスタッフ、そして患者さんや地域の方々まで、一人ひとりの出会いを決して疎かにせず、誠実に向き合い続けること。その一つひとつの大切なご縁の積み重ねが、将来自分が予期せぬ大きな壁にぶつかった時や、新しい道へ踏み出す時に、必ずあなたを支え、救ってくれます。

Q2. 最後に、外科を目指すか迷っている若い先生方へ、一番伝えたいメッセージをお願いします。

自分の手で病気を解決できる確かな技術・知識を持つことは、医師としての可能性や選択肢、そして精神面での幅を圧倒的に広げてくれます。

そして何より、外科医としての技術や経験は、想像以上に多様で素晴らしい人々との出会いを生み出してくれます。私自身、先進医療の現場から地域医療、医療行政、災害医療（JMAT）に至るまで、想像もしなかった多彩なフィールドで多くの仲間と出会うことができましたが、その全ての根底にあったのは外科医として培った知識と手技でした。

自分の手で患者さんを救い、一人の人間として深い人生に関わり、かけがえのない仲間と繋がっていく。外科にはそんな素晴らしい未来が待っています。ぜひ勇気を持って、この世界に飛び込んできてください！